

長崎放送

活動名	平和文学朗読キャラバン
実施期間	令和 5 年 6 月～ 9 月
実施回数	オンライン 19 団体

【事業実施の成果・課題】

平和文学朗読キャラバン 19 年目の今年は、長崎・佐賀県内の 19 団体（小学校・中学校・学童クラブ）にアナウンサーが朗読した映像を事前に収録し、学校向けに閲覧ページを作成、限定視聴を行いました。

今年は、3671 人の児童生徒が平和文学の朗読を視聴。参加人数は昨年までと合わせると、203 団体・3 万 1926 人となりました。

新型コロナの影響で 4 年連続、動画配信スタイルでの朗読・視聴となっていますが、参加頂いた先生方からは「毎年、8 月 9 日当日やその前に平和学習の機会を設けているが、被爆者の方々の数も減り、来校してもらうことが減った。こういう機会は、子どもたちに平和教育を行うのに、大変ありがたい。」「今年は 8 月 9 日に台風が接近し、登校日がなくなり、平和学習が急遽 9 月に延期になってしまった。視聴日の急遽の変更に対応頂き、大変有難かった。」など多数嬉しいお声を頂きました。

今年も直接学校を訪問せず、再生動画を限定配信するというスタイルでの実施ということで、急遽の延期にもスムーズに対応することができました。また今年も、応募いただいた全ての団体へ視聴をして頂きました。

<課題>

毎年、8 月 9 日に平和学習を設ける学校も多く、動画視聴を長崎原爆当日に視聴される団体が多くあります。ただ今年は、8 月 9 日に台風が接近し、平和学習を予定していた学校から急遽連絡があり、登校日がなくなって 1 校がキャンセルに、5 校が 9 月に延期という異例の事態となりました。今回も動画視聴ということで、緊急の視聴延期にも対応することができました。

一方でコロナ禍前まで行っていた、アナウンサーが学校を訪問するというスタイルを、復活させて欲しいというご要望もあります。また、生で子どもたちに平和の話を伝える経験をしたアナウンサーからは、やはり直接子どもたちに伝えたいという声も聞かれます。企画の応募状況や、子どもたちの反応、ラジオ・テレビ番組に届くメッセージなどから、当キャラバンの「地域への浸透」や「期待と責務」も実感しています。来年以降、実施形態について社内で議論を重ね検討していくことにしております。

【事業担当者およびアナウンサー（講師・読み手）の感想】

被爆から 78 年が経ち、長崎・広島では、語り部（被爆者）の高齢化が進んでいます。今年も新型コロナウイルスの感染拡大防止対策として「平和文学朗読キャラバン」の実施方法について、こういった形が望ましいのかいろんな意見が出ました。

被爆地の放送局のアナウンサーの私たちにできることは何なのか。改めて自問自答し、今年もアナウンサーが事前に朗読し収録した映像を編集し限定配信する形を採用しました。課題の部分でも明記しておりますが、「直接子どもたちに平和について話をしたい。」「生の朗読を届けたい。」このような意見も上がり、また一部の学校からも「アナウンサーの方に来校してほしい」などのご要望もございます。

限定配信というスタイルと、どちらが児童生徒たちにより伝わるのか。今後も、状況を鑑みながら私たちなりの分析が必要だと実感しています。いかなる状況でも、子どもたちに「平和の尊さ」を伝える活動は絶やしたくない。この思いを改めて感じているところです。

【教諭・保育士・子どもたち・視聴者などの感想】

19 団体・3671 人の児童生徒に参加頂き、感想文を送って頂きました。

その中から一部を原文のまま抜粋致しました。

<小学1年生>

- ・もう 2 どとせんそうをしないで、げんしばくだんをつくらないようにがんばります。
- ・みんながなかよくしてほしいです。
- ・ぜったいせんそうはしないでください。

<小学6年生>

一番最初に感じたのは戦争は核兵器はこわくておそろしいものだということ。そしてたくさんの人の命をうばったということ。大切なのは人の命も。やっぱり戦争は絶対にしてはいけないこと。平和が一番。そしてそれを思うだけにしちゃいけない。それを実現させないといけない。おとなになっても平和を実現させるために考え続けようと思う。

<中学生>

・今回平和文学朗読を聞いて私は、長崎でも広島でもとても大きな被害があって大変だったなと思いました。7 万人や 14 万人の方が亡くなっていて悲しかったです。吉田さんも被害に巻き込まれて耳を失って顔に皮膚移植をしてみんなに軽蔑の目で見られたり避けられたりして苦しんでいたんだなと思いました。このことから、戦争・原爆の被害は「体だけでなく心も傷ついてしまう」と言うことがわかりました。今は、ウクライナ侵攻がずっと続いています。ウクライナの人々も大変な目にあって子どもと離れ離れになったりして苦しい生活を送っています。1945 年当時の日本と同じ状況がウクライナで起こっています。私は日々の細かい争いごとをなくしていくことが大切だなと思います。小さなことでも、範囲が広がると抗争→紛争→戦争となるのでまずはそれを防いでいきたいです。そして、長崎を最後の被爆地とできるようにしていきたいです。

・吉田さんの話は、自分が想像していた以上に怖くて、聞いていて悲しくなりました。自分は今、平和な日本に生まれてきて裕福な生活を送っているけど、自分が笑っている間も原子爆弾などの後遺症で苦しんでいる人がいると思うと、つらい気持ちになりました。私達に戦争の悲惨さを教えてくれる語り部さんたちもお年寄りになってきて、話したり、色々なところに行ったりできなくなってくる方々が増え

てくると思います。だから自分たちで戦争の悲惨さを、長崎の原子爆弾のことを、亡くなった人たちのことを、被害の多さを、今の長崎の平和を、街を、戦争のことについて知らない人たちに私達から伝えていかなければいけないと思いました。「長崎を最後の被爆地に」するために、核兵器廃絶のポスターなどを作って掲示したりするなど、自分たちにできる取り組みはたくさんあります。「命の重さは皆同じ。」植物も一つの命を、小さな虫も一つの命を、鳥も魚も一つの命を、人間も一つの命があります。もう二度と、 78 年前の悲しい悲劇がおこらないように、自分たちから平和を発信し、喧嘩をなくし、日本に生まれてきてよかったと思えるような国がこれからも続いていけるようにしたい。そして、みんなの命を大切にしたい。